

山口情報芸術センター [YCAM] 展覧会

## 「MEDIA/ART KITCHEN YAMAGUCHI— 地域に潜るアジア：参加するオープン・ラボラトリー」

2014年7月5日（土）— 9月28日（日） 10:00 — 19:00 入場無料  
山口情報芸術センター [YCAM] ホワイエ、スタジオB、2階ギャラリーほか

### 地域社会における「メディア」と「アート」の新しい可能性 — アジアのアーティストと市民との協働を生み出すラボラトリーがYCAMにオープン！

山口情報芸術センター [YCAM] では、アジアの若手アーティストの地域社会に根差した取り組みを紹介する市民参加型の展覧会「MEDIA/ART KITCHEN YAMAGUCHI— 地域に潜るアジア：参加するオープン・ラボラトリー」を開催します。

本展は昨年、日・ASEAN友好協力40周年記念事業の一環として、東南アジア4ヶ国で開催された国際交流基金主催の展覧会を出発点に、YCAMがコミュニティ・デザインの視点から発展させる関連企画で、日本のほかインドネシア、シンガポール、マレーシアからアーティストが参加します。会場にはアーティストごとに「ラボラトリー」と呼ばれる空間が設けられ、ここを起点に市民との対話を通して農業や林業、歴史、文化といった地域固有の課題と資源についてリサーチをおこない、随時開催するワークショップなどを通じてメディアやアートによる生活の新しい可能性を描き出すための実践を展開します。

山口市民と多様な文化的背景を持つアーティストたちとの出会いと協働を促す本展は、山口の創造的なコミュニティを新たに生み出すことになるでしょう。この機会にぜひご参加ください。

この機会に、取材や記事掲載にご協力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

【お問い合わせ】

山口情報芸術センター [YCAM] 学芸普及課  
〒753-0075 山口県山口市巾着町7-7

TEL：083-901-2222 FAX：083-901-2216 メールアドレス：press@ycam.jp ウェブサイト：www.ycam.jp

取材に関するお問い合わせ、プレス用写真等ご入用の方は上記までご連絡ください。



会場の様子

#### ■ 参加アーティストとラボラトリー

パニ・ハイカル (シンガポール)

「音のラボラトリー」

HONF Foundation (インドネシア)

「竹のラボラトリー」

オペラシ・キャツサバ (マレーシア)

「食物のラボラトリー」

田村友一郎 (日本)

「穴のラボラトリー」

YCAM 地域開発ラボ (日本)

「メディア・テクノロジーと地域を繋ぐラボラトリー」

## 「潜る」ことで見えるもの — ポスト・グローバル時代の新しい「創造」に向けて



山口市の阿東地区でおこなわれたワークショップの様子

### ■ ラボラトリー

本展の会場は山口市内で採れた250本ほどの竹を使用して構成されている。アーティストごとに「ラボラトリー」とよばれる対話のためのスペースが用意されているほか、中心部にはデッキ状の空間がある。この空間では、トークイベントが開催されるほか、何もイベントがないときは来館者のための憩いのスペースにもなる。会場構成は大阪の建築ユニット「dot architects (ドット・アーキテツ)」が、会場サインは同じく大阪のグラフィックデザインチーム「UMA/design farm」が担当。

本展は、日本を含むアジア4ヶ国からやって来た5組のアーティストが山口市民とつくる集落のような展覧会です。

それぞれのアーティストたちは、山口市内で長期に渡るフィールドワークをおこない、地域の課題や資源を見つけ出してきました。会場内に用意された「ラボラトリー」と呼ばれる空間を拠点に、市民と協働しながら新しいアイデアを作り出すための活動を展開していきます。

こうしたアプローチの背景には、いくつかの狙いがあります。まず、山口市民とはバックグラウンドが大きく異なる人々が山口という土地に訪れ、フィールドワークをおこなうことで、そこで暮らす人々には気づきにくい課題や資源を見出しやすくなるということ。そしてもう一つは、山口ひいては日本に潜在する「アジア性」を表出させるということです。

明治維新以降の近代化、それに続くグローバル化の波は、日本という地理的／文化的にアジアの一角を占める地域の「アジア的側面」を忘却するよう強いてきました。しかし、経済格差の拡大などグローバル化が孕むリスクが顕在化しつつある今、日本人の多くがグローバル化に立脚した価値観や生活観を見直す必要に迫られています。その鍵を握るのが、私たちの生活の古層に潜んでいる近代以前の社会のあり方、自然との関わりといった一種の「アジア性」です。

本展は、こうした多層的な「潜る」によって開かれる「新しい共同性」に目を向けながら、メディア・テクノロジーの新たな可能性を試行していきます。

## 「竹のラボラトリー」— HONF Foundation (インドネシア)



リサーチのため、山口市阿東地域の農家を訪問するヴェンザ・クリスト (写真左)  
(2014年3月)

「HONF Foundation (ホンフ・ファウンデーション)」は、1999年にヴェンザ・クリストをはじめとした数名のアーティストにより、インドネシアのジョグジャカルタで設立された、テクノロジーとアートのためのラボラトリーです。あらゆる立場の人に向けて開かれていることが特徴で、アーティストや科学者などの専門家、活動家、教育機関、学生などが関わることで膨大なアイデアを創出し、プロジェクトとして実現させています。

近年では東南アジア初のファブラボ「HONFabLab (ホンファブラボ)」を設立し、実際に地域社会で機能する仕組みを創出する活動をプロトタイプレベルから展開しており、特に自給自足型のエネルギーモデルをベースとした農村プロジェクトや、低コストで作成が可能な義足の開発などは、世界的に高い注目を集めています。

本展では、山口市の中山間部で大量に自生する「竹」に注目。竹は日用品や建物などの原材料として利用されている一方で、その成長のスピードゆえに整備されない竹林が、農地や宅地を浸食してしまうという問題があります。そこで、彼らは竹林を整備する過程で得られた竹をもとに、人が集える場所をデザインし、地域の人を繋げながら新しいプロダクトの開発プランの提案など、多岐に渡る竹の利用方法を実験し、情報の共有をおこなうほか、ワークショップを実施していきます。

また、これに連動してスタジオBにて、竹で制作したスピーカーによるインスタレーション「ユア・ヒストリー・ハズ・ア・サブライズ・ビギニング」を展示します。

### ■ ファブラボ

ファブラボは、「ほぼあらゆるもの ("almost anything")」をつくることを目標とした、3Dプリンタやカッティングマシンなど多様な工作機械を備えたワークショップ。世界中に存在し、市民が自由に利用できる事が特徴。「ほぼあらゆるもの」の中には、大量生産・規模の経済といった市場原理に制約され、いままで作り出されなかったものが含まれる。ファブラボは、個人が、自らの必要性や欲求に応じて、そうした「もの」を自分(たち)自身で作り出せるようになるような社会をビジョンとして掲げており、それを「ものづくり革命 (Industrial (Re)volution : 第2次産業革命)」とも呼んでいる。「ファブ」には、「Fabrication」(ものづくり)と「Fabulous」(楽しい・愉快的)の2つの単語がかけられている。(Wikipedia「ファブラボ」より抜粋)

### ■ 山口の竹



山中から竹を下ろす、阿東の竹林ボランティア山口のみなさん  
(2014年5月)

本展で使用されている竹はすべて、阿東地区をはじめとした山口市内で切り出されたものです。山口県は竹林保有面積が全国3番目に多く、手入れが行き届かず、繁茂が顕在化している現状に、利用されない資材をもとに展覧会の会場を構成していくアイデアを構想しました。地域の中に眠っていた資材が、本展覧会に大きな影響を与えています。

## 「食物のラボラトリー」— オペラシ・キャッサバ (マレーシア)



YCAM内に出現したキャッサバ畑の様子

「オペラシ・キャッサバ」は、リム・コクヨン、ヤップ・ソービンらによって始められた、食物のキャッサバを通じてマレーシアの文化的アイデンティティを探るプロジェクトです。

日本ではタピオカの原料として知られるキャッサバは、東南アジアをはじめ、南米やアフリカでは極めて一般的な食材のひとつです。東南アジアには南米から持ち込まれ、その後イギリスによる植民地支配下の時代に、でんぷん粉の工業製品としての利用目的で生産量が一気に増大し、さらには第二次世界大戦中に旧日本軍が東南アジアで主食の米を独占してしまったため、現地の住民の主な食料になったという、東南アジアの歴史を象徴する食物としての側面も持ち合わせています。

このような背景を持つキャッサバは、様々な民族と宗教を抱えるマレーシアにおいても広く普及しており、それぞれの民族の特徴に合わせてローカライズされる一方で、多民族の間に共通したキャッサバの記憶があり、民族間を繋ぐものの象徴として捉えることもできます。オペラシ・キャッサバはこうした歴史や状況を踏まえ、インターネットを利用して、人々からキャッサバにまつわる個人的な記憶を集めることにより、マレーシアの文化や、歴史的な背景を描き出す試みを展開しています。

本展では、ラボラトリー内に畑をつくり、キャッサバを栽培。栽培や収穫、そして食べることを通して、参加者に他国が持つ記憶と歴史を追体験してもらうほか、畑とキャッサバを中心とした新たなコミュニティを形成し、キャッサバにまつわる新たな体験と記憶を蓄積していきます。

### ■ キャッサバ



YCAMのキャッサバ畑

キャッサバ (学名: *Manihot esculenta*) は、トウダイグサ目トウダイグサ科イモノキ属の熱帯低木。マニオク、マンジョカとも呼ばれる。

芋はタピオカの原料であり、世界中の熱帯にて栽培される。

作付面積あたりのカロリー生産量はあらゆるイモ類、穀類より多くデンプン質の生産効率が高い。しかし食用とするためには毒抜き処理が必要なことや、毒抜きのために皮や芯を除去した芋はその場で加工しなければ腐ってしまうなど、利用の制約が大きい作物でもある。利用範囲は広く、葉を発酵させて毒抜きし飼料として利用したり、アルコール発酵によりバイオ燃料(バイオマスエタノール)を製造するなどの用途も注目を浴びている。

(Wikipedia「キャッサバ」より抜粋)

## 「穴のラボラトリー」 — 田村友一郎 (日本)



「穴のラボラトリー」に設置された法螺貝  
伝聞をつくり、広めていくためのマイクとスピーカーが内蔵されている

田村友一郎はこれまで、写真・映像表現を軸に、さまざまな地域の歴史や文化を辿るフィールドワークをおこないながら、地域の過去と現在を再構成・再提示するインスタレーションや彫刻などを発表してきました。

本展に先駆けておこなったリサーチを通じて、田村は山口市やそこに住む人々に対して「清廉さ」を感じたと言います。と同時に、その裏には「清廉さ」からかけ離れた知られざる一面が潜んでいるのではないかと考えたそうです。「行政の街」とも称される山口市の持つ清廉で静かなイメージと、それと対をなす地域住民の独特な個性。そうしたギャップを実際に探し出し、「物語」として抽出できないかという発想からスタートしたのが「穴のラボラトリー」です。

このラボラトリーでは、山口市をモチーフにした仮想の都市「Y市」を設定し、その住民である「Y市民」が、山口に古くから伝わる「鷺流狂言」の物語を起点に、展覧会に訪れた人々の話を収集し、その話を伝聞させていくプロジェクト「Y市の出来事」を展開します。山口市が持つ「ギャップ」の象徴としての鷺流狂言に触発されて、口をついた個人の物語がY市民の耳へ、そしてY市民の口から誰かの耳、さらには誰かの耳から違う誰かの口へ。このように来場者の話が、「穴」を通過しながら無限に拡散していきます。その過程で山口市の新たな都市像や市民像が浮かび上がることでしょう。

また会期終盤の9月13日、14日にはスタジオAにて「Y市の出来事」のイベントを「Y市民」によって開催する予定です。

### ■ 山口鷺流狂言

江戸時代の狂言には、大蔵・鷺・和泉の3つの流派があるが、幕藩体制の崩壊によりその後ろ盾を失い、大蔵流と和泉流は復興したものの鷺流は中央では廃絶しました。その中で、萩藩のお抱え狂言に源流を持つ山口の鷺流狂言は、今日まで命脈を保っています。その歴史は、長州藩狂言方の春日庄作(しゅんにち・しょうさく)が素人衆に狂言を教え始めたことに始まり、町の人々が相互に稽古をつける「伝習会」によってその歴史は受け継がれています。

## 「音のラボラトリー」— バニ・ハイカル (シンガポール)



県内の民謡に詳しい民謡研究者、伊藤武さん（2014年5月）

バニ・ハイカルはシンガポールを拠点に文化、言語、音の知覚を検証し、リサーチをおこなっているミュージシャン／サウンドアーティストです。

本展では、「音のラボラトリー」として、山口の多様な地域性を表す2種類の音源を紹介し、音から山口について考えるプロジェクトを展開していきます。

紹介する音源のうち1つ目は、山口で古くから人々が仕事の際に口ずさんでいた「作業歌」です。作業歌とは、かつて仕事の効率を上げるために、作業の動きに応じて歌われていたもので、たとえば山間部では農業や林業にまつわる歌が多く残されているほか、沿岸部では製塩業や石材産業にまつわる歌が多数残されています。これらの歌は、山口の人々がかつてどういう仕事に従事していたかを伝えると同時に、山口の自然や、そこで働く人々の身体を生々しく伝えるメディアとしての側面もあります。

2つ目は、2012年に山口市内の3つの小学校に通う小学生たちがそれぞれの暮らす地域で録音した音源です。子どもたちの瑞々しい感性で切り取られた山口の音は、山口の風景を思いおこさせると同時に、多くの発見ももたらしてくれます。

このラボラトリーでは、こうした音源を紹介するほか、この音源を出発点にバニ・ハイカルが市内各所にてリサーチのためのフィールドワークをおこないます。さらに山口について掘り下げていきます。また、会期中開催される「大友良英FENオーケストラ」のライブ・コンサートにも参加し、アジアのミュージシャンたちとともに、パフォーマンスを披露します。

### ■ ワークショップ「walking around surround—山口の音に耳を傾ける」



フィールドレコーディングの様子（2012年）

山口市内の海、森、街の各地域で暮らす小学生がそれぞれの土地でフィールドレコーディングをおこない、そこで採取した音を空間的に再構築することで、山口市における地域の多様性を考えるワークショップ。

開催日時：2012年7月31日（火）

参加小学校：山口市立大殿小学校、秋穂小学校、嘉年小学校

講師：坂本龍一（音楽家）

## 「メディア・テクノロジーと地域を繋ぐラボラトリー」— YCAM 地域開発ラボ(日本)



会場内にあるYCAM地域開発ラボ「メディア・テクノロジーと地域を繋ぐラボラトリー」の様子

YCAM地域開発ラボは、2014年4月にYCAMに附属する研究開発チーム「YCAM InterLab (インターラボ)」内に新設されたラボラトリーです。YCAMは、これまでアーティストとともに作品を制作し、世界各地で発表をおこなってきた一方で、その成果を公園型の遊戯施設「コロガルパビリオン」や、オリジナルワークショップなど、メディア教育というかたちで地域社会へと還元する仕組みをつくってきました。地域開発ラボは、この流れを踏襲して、YCAMが得意とするメディアテクノロジーに関するスキルを、地域課題の解決によりダイレクトにつなげていく活動を展開しています。

本展では、工房、広場、ラジオ局の3つを設置し、これらを会期中活発に運用していくことで、市民との交流による地域課題の抽出と、課題に対する新たなビジョンの創出を目指します。

工房では、3Dプリンターなどの工作機器を使用し、山口の竹と和紙でつくる「デザインちょうちん」を制作するほか、同時期に再開する「コロガルパビリオン」での「遊び」を開発します。また広場では、本展に向けたリサーチの過程で出会った様々な分野のエキスパートたちのトークイベントを開催するほか、来場者の知恵を集める「YCAM知恵袋」を開催します。そして、地域の人々が運営するラジオ局では、2011年にYCAMの教育普及プログラムから生まれたコミュニティラジオ局「ライブラリーラジオ」や、山口市内を拠点に展開する「経済」をテーマにしたインターネットラジオ番組「ラジオのマネー」による公開収録・生放送をおこない、展覧会についての情報を館内に発信していきます。

### ■ 徳地和紙

山口市の徳地地区で生産される和紙。徳地和紙の歴史は古く、室町の大内氏の時代には「得地紙」と呼ばれたいへん質の高い紙が生産されていました。現在でも、手透きの伝統がわずかながらも受け継がれており、山口市の無形文化財に指定されています。

## 開催概要

**「MEDIA/ART KITCHEN YAMAGUCHI —  
地域に潜るアジア:参加するオープン・ラボラトリー」**

2014年7月5日(土) — 9月28日(日) 10:00 — 19:00

火曜休館(祝日の場合は翌日) 入場無料

山口情報芸術センター [YCAM] ホワイエ、スタジオB、2階ギャラリーほか

参加アーティスト/機関:

パニ・ハイカル、HONF Foundation (ヴェンザ・クリスト、ユディ・アスモロ)、  
オペラシ・キャッサバ、田村友一郎、YCAM地域開発ラボ

共同リサーチ・プランニング: ファブラボ北加賀屋

会場デザイン: ドットアーキテクト

グラフィックデザイン: UMA/design farm

**これまでのリサーチの様子や、会期中のイベント情報などは、  
特設ウェブサイトをご覧ください。**<http://mak.ycam.jp>

主催: 公益財団法人山口市文化振興財団、国際交流基金アジアセンター

後援: 山口市、山口市教育委員会

平成26年度 文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

機材協力: カラーキネティクス・ジャパン株式会社

協賛: 太洋塗料

連携: 青森公立大学国際芸術センター青森 (ACAC)

共同開発: YCAM InterLab

企画制作: 山口情報芸術センター [YCAM]



## 連携企画

本展の連携企画として、青森公立大学国際芸術センター青森 (ACAC) にて  
「MEDIA/ART KITCHEN AOMORI」が開催されます。

## 夏のアーティスト・イン・レジデンス2014

## 「MEDIA/ART KITCHEN AOMORI —ユーモアと遊びの政治学」

会場: 青森公立大学国際芸術センター青森 (ACAC) (青森県青森市合子沢字山崎152-6)

滞在制作期間: 2014年6月1日(日) — 9月19日(金)

展覧会会期: 2014年7月26日(土) — 9月15日(月・祝)

オープニングトーク: 2014年7月26日(土) 14:00 — 16:00

参加アーティスト: 萩原健一(日本)、パニ・ハイカル(シンガポール)、堀尾寛太(日本)、クワクポリョ  
ウタ(日本)、毛利悠子(日本)、ナルパティ・アワンガ a.k.a. オムレオ(インドネシア)、レナン・オ  
ルティス(フィリピン)、プリラ・タニア(インドネシア)、チュラヤーノン・シリポン(タイ)、ファイ  
ルズ・スライマン(マレーシア)、竹内公太(日本)、田村友一郎(日本)



## 関連プログラム

## ライブ・コンサート「sound tectonics #14」

日時：8月2日（土）14:00開演、3日（日）14:00開演

会場：2日＝山口情報芸術センター [YCAM] 全館、3日＝スタジオA

出演：大友良英FENオーケストラ

大友良英を中心としたアジアのミュージシャンにより構成されるバンドのライブパフォーマンス。

## ワークショップ

日時：8月8日（金）、9日（土）※各日完結

会場：ホワイエ

講師：ファブラボ北加賀屋（日本）、HONF Foundation（インドネシア）、

スージー・スレイマン（マレーシア/DA+C Festival プロデューサー）＋会田

大也（日本/東京大学大学院特任助教/元・YCAMエディタールーター）

## 国際シンポジウム

## 「Localizing Media Practice — 地域化するアートの未来」

日時：8月10日（日）13:30 — 17:30

会場：ホワイエ

パネリスト：スージー・スレイマン、イ・スジユン（韓国）、ヴェンザ・

クリスト（インドネシア）、シュレイアス・カルレ（インド）

モデレーター：会田大也、阿部一直（日本/YCAMチーフキュレーター）

ワークショップ/シンポジウム  
申込方法

下記の項目を明記の上、メールまたはFAXにてお申し込み下さい。

- ・イベント名
- ・住所、氏名（ふりがな）、性別、生年月日
- ・電話番号、メールアドレスなど連絡先

[reserve@ycam.jp](mailto:reserve@ycam.jp)